



TITLE:

# 唐の監牧制と中國在住ソグド人の 牧馬

AUTHOR(S):

山下, 將司

---

CITATION:

山下, 將司. 唐の監牧制と中國在住ソグド人の牧馬. 東洋史研究 2008, 66(4): 539-569

ISSUE DATE:

2008-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/141875>

RIGHT:

# 東洋史研究

第六十六卷 第四號 平成二十年三月發行

## 唐の監牧制と中國在住ソグド人の牧馬

山下 將 司

はじめに

一 ソグド人の牧馬官就任事例と唐の監牧制

二 夏州群牧と武威安氏

三 「安忠敬墓碑」に見る武威安氏の牧馬

四 固原史氏と監牧制

むすび

はじめに

近年中國では、北朝後期から唐前半にかけてのソグド人のものと思われる墓地の發見・發掘が相次ぎ、それに伴って多くの漢文墓誌が出土した。一九八〇年代から九〇年代にかけて、寧夏回族自治区固原縣南郊で發掘された史氏一族墓を皮切りに、一九九九年には山西省太原市で虞弘墓が發見され、また、陝西省西安市では二〇〇〇年以降、安伽墓・史君墓・康業墓等の發見が相次いだ。さらに、陝西省北部の靖邊で一九九四年に發見された翟曹明墓もソグド人墓である可能性が

高いという<sup>(1)</sup>。墓誌の記載から、以上の墓の被葬者あるいはその祖先は、いずれも北朝後期には中國へ移住し植民聚落を形成していたと見られる。こうした新出土史料の他にも、中國では夥しい數の墓誌を載録した史料叢書が陸續と刊行され、その中で新たに公にされたソグド人漢文墓誌も少なくない。このような状況の中、北朝末から唐初にかけて中國に移住したソグド人の情報は飛躍的に増加し、彼らの存在形態や活動の實態が徐々に明らかにされつつある。

北朝末から唐初にかけての中國在住ソグド人の中でも、際立った勢力を築いたのが武威安氏と固原史氏である。涼州（武威郡）姑臧を據點とし、隋末唐初に活躍した安興貴・修仁の兄弟で名高い武威安氏は、ブハラ出身で、北魏後期よりソグド人聚落の首領である「薩寶」の職を繼承した。隋末の混亂期には、安修仁が他の仲間と共に河西に李軌政權を擁立し、長安に唐朝が成立すると、今度は兄弟でソグド人軍團を率いて李軌政權を轉覆させ、河西一帯を唐朝に獻じた。武威安氏はソグド人でありながら、一軍閥政權の興亡を左右するほどの實力を有したのである。一方の固原史氏は、原州（平涼郡）高平を據點とする。固原史氏とは、一二つの有力な一族の總稱で、武威安氏と同じく北魏後期に中國へ移住したと見られるキツシュの出身者である。北朝末から原州に住み着いて土着勢力と化し、少なくとも唐の高宗期に至るまで長安政權との關係を保った。隋末には原州一帯の治安・軍事を統轄するまでに至り、唐成立後はこれに歸屬して、隴右の薛舉政權打倒に協力した。

この二つの地におけるソグド人集團が、右のような勢力を有するに至った一つの背景として、軍府官、すなわち北朝末に始まる府兵制の軍府の長官を歴任していたことが挙げられる。彼らはそれぞれソグド人社會のリーダーとして長安政權から軍府官に任じられ、自らの植民聚落から軍團を組織していたのである。隋末には、これを背景に一種の軍事勢力と化し、唐朝による統一に直接的な援助を與えたのであった<sup>(2)</sup>。

ところで、武威安氏と固原史氏には、「軍府官の歴任」という點以外に、もう一つ共通する特徴が見られる。それは牧馬官、すなわち唐の馬政に關わる官職を歴任していることである。しかも、「軍府官の歴任」が他の中國在住ソグド人に

もしばしば見られるのに對し、「牧馬官の歷任」は墓誌等の諸史料を検索しても、この二つのソグド集團に限定される。この第二の共通點は、兩ソグド集團の勢力形成といかなる關係を有しているのであろうか。また、彼らソグド人による牧馬官の就任は、唐代の馬政の中でどのような意義をもつのであろうか。

本稿では、唐代前期における軍馬飼養の體制である監牧制と、武威安氏・固原史氏兩ソグド集團との關係の考察によつて、中國在住ソグド人の活動の新たな一面を説明することを目的とする。

### 一 ソグド人の牧馬官就任事例と唐の監牧制

まず、編纂史料および出土墓誌等から檢出された、ソグド人の牧馬官就任事例を年代順に一覽にしたものを表一に示す。右の事例のうち、①②④は固原史氏に屬し、③⑤は武威安氏に屬す。つまり、⑥を除くと固原史氏と武威安氏によつて

表一 ソグド人の牧馬官就任事例

	人名	就任年	職名	出典
①	史訶耽	武德九年（六二六）	左監	『史訶耽墓誌』（六七〇年刻）
②	史鐵棒	顯慶三年（六五八）	右一七監	『史鐵棒墓誌』（六七〇年刻）
③	安元壽	永隆二年（六八一）頃 總章二年（六六九）頃	夏州群牧使 玉亭監	『唐會要』卷七二馬・『冊府元龜』卷六二監牧
④	史道德	咸亨三年（六七二） 上元三年（六七六）	蘭池監	『史道德墓誌』（六七八年刻）
⑤	安忠敬	久視元年（七〇〇） 開元七年（七一九）以前	赤水・新泉兩軍監牧使	張說「安忠敬碑銘」（七二六年撰、張說之集」卷一六所載）
⑥	安祿山	天寶一三年（七五四） 一四年（七五五）	閑廐・五坊・宮苑・隴右群牧都使	『舊唐書』卷九玄宗紀下

占められる。また、牧馬官と一口に言っても、○○監・監牧使・群牧使等、さまざまな官名が見える。そこで、各官の職掌とその就任の意義を明らかにするためにも、やや紙面を割いて、監牧制なる制度について概観しておきたい。<sup>(4)</sup>

監牧制とは、唐代前期に施行された軍馬飼養の體制である。監牧と呼ばれる各地に設置された官營牧場を基盤とし、その牧場の長官を牧監という。『唐六典』卷一七太僕寺には牧監および監牧についての規定が、次のように記される。〔「は割り注〕。

諸ぞ牧監、群牧の孳課の事を掌る。凡そ馬五千匹もて上監と爲し、三千匹已上もて中監と爲し、已下もて下監と爲す。……凡そ馬に左右の監有り。以て其の羴良を別ち、數紀を以て名と爲し、而して其の簿籍に著す。細馬の監は左と稱し、羴馬の監は右と稱す〔其の雜畜牧は皆下監に同じく、仍りて土地を以て監名と爲す〕。

監牧には左右の二種類が存在し、「左」は細馬すなわち良馬を育成する牧場であり、「右」は羴馬すなわち粗雜馬を育成する牧場である。さらに、監牧は飼養する馬の頭數によつて上中下の三種にも區別される。ただ下監の區分基準には史料によつて異同があり、『舊唐書』卷四四職官志三では傍線部「已下」を「一千匹以上」とする。

ところが、右の『唐六典』をはじめとする傳世史料よりもさらに詳細な監牧設置規定が、『天一閣藏明鈔本天聖令』に存在する。一九九九年に中國・寧波の天一閣博物館で發見された天聖令寫本には、これまで知られていなかった唐令（開元二五年令）が多數含まれており内外の研究者を驚かせた。その中の「廐牧令卷第二四」には三五條にわたる唐の廐牧令が收録されていた。ここでは、次の條文に注目したい。<sup>(5)</sup>

諸ぞ牧、細馬・次馬の監を左監と稱し、羴馬の監を右監と稱し、仍りて各々弟を起こすに、一に次を以て名と爲す。<sup>1</sup>

馬五千匹以上に滿つれば上と爲し〔數うるに孳生を外し、草父の三歲以上を計り、五千匹に滿つれば、即ち所司に申（原文は甲に作る）して別に監を置（原文は直に作る）け〕、三千匹以上を中と爲し、三千匹に滿たざるを下と爲す。其れ雜畜牧は皆な下監に同じ〔其の監は仍りて土地を以て名を謂う〕。即ち別に監を置くに應たり、官の牧監、私牧と相い妨ぐるは、

並びに私（原文は司に作る）牧を諸處に移し替を給せよ。其れ屋宇有らば、毀剔せしむる勿かれ。即ち在牧の人に給して坐せしめ、仍りて州縣は量りて功力および價值に酬いよ。

この一條は仁井田陞著『唐令拾遺』（東方文化學院東京研究所、一九九三）や仁井田陞著・池田溫代表編集『唐令拾遺補』（東京大學出版會、一九九七）にも載録されておらず、天聖令寫本によつて初めて明らかになった令文である。まず、傍線部イ「仍りて各々弟（Ⅱ第）を起こすに、一に次を以て名と爲す」の記載から、監牧は設置された順番に従つて、機械的に番號が附けられていったと解釋できる。したがつて、表一の①史訶耽が任じられた「左二監」とは、「二番目に設置された良馬を産出する官營牧場の長官」であり、②史鐵棒が任じられた「右一七監」とは、「一七番目に設置された粗雜馬を産出する官營牧場の長官」であることが判明する。ただし、この設置番號が左右それぞれに分けて附けられたものか、左右併せた通番であるのかは判然としない。

また、下監については、傍線部口からその分類基準が三千頭未満であつたことがはっきりする。さらに、傍線部ハ「其の監は仍りて土地を以て名を謂う」の割注から、下監は上監や中監とは異なり、地名を牧場名に冠していたことがわかる。なお、『唐六典』にも同意の割注が認められる。したがつて、表一の④史道德が任じられた「玉亭監」「蘭池監」とは、牧馬三千頭未満の下監の長官であつたことになる。

それでは、右のような監牧を中心とする軍馬飼養の體制は、いかなる経緯から施行され、どのように發展していったのであろうか。これについて傳える基礎史料と見られるのが、『唐文粹』卷二二所載張說「大唐開元十三年隴右監牧頌德碑」（以下「監牧頌」と略稱）である。<sup>(6)</sup>

大唐、周隋亂離の後に接し、天下征戰の弊を承け、殘燼を鳩括するも、僅かに牝牡三千を得るのみ。赤岸澤從り之れを隴右に徙し、始めて太僕張萬歲に命じて其の政を葺しむ。而して奔（突の誤り）世德を載し、其の緒を纂修す。貞觀自り肇め、麟德に成り、四十年間、馬は七十萬匹に至る。八使を置き、以て之を董べ、四十八監を設けて以て之

を掌らしむ。隴西・金城・平涼・天水四郡の地に跨り、幅員千里、猶隘狭と爲すがごとし。更めて八監を析き、河曲に布く。豐曠の野、乃ち能く之を容る。斯の時、天下一縑を以て一馬を易う。秦漢の盛も、未だ始めて聞かざるなり。北周・隋による混亂と、激しい中國統一戦を経た後、唐朝の手元に残された軍馬はわずか三千頭であつた。そこで唐朝は、貞觀年間（六二七～六四九）になけなしの三千頭を京師東方の赤岸澤（後掲『元和郡縣圖志』卷三關內道三原州に據る）から隴右に移轉させ、その地にて監牧制を開始したのだという。以來、監牧は渭州（隴西郡）・蘭州（金城郡）・原州（平涼郡）・秦州（天水郡）の一帯に増置され、麟德年間（六六四～六六六）には四八監に達し、飼養される軍馬も七〇萬頭に至つた。この監牧制施行の経緯については『新唐書』卷五〇兵志にも、

馬は、兵の用なり。監牧は馬を蕃やす所以なり。其の制は近世に起る。唐の初めて起るや、突厥馬二千匹を得、又隋馬三千を赤岸澤に得たり。之を隴右に徙し、監牧の制は此に始まれり。

とある。これも「監牧頌」に基づいた記述と見え、同様に、軍馬の隴右移轉をもつて監牧制の開始と見る。ただし、施行時に唐朝が保有していた軍馬の数は、三千に「突厥馬」すなわち太原舉兵時に突厥より得た二千頭を足して五千頭としてゐる。他に『唐會要』卷七十二馬にも、「監牧頌」の右の部分がほぼそのままに引用されている。

ところで、「監牧頌」には、監牧制施行の當初から「太僕」張萬歲が諸監牧を統轄したかのように記されるが、これが正確ではないことはすでに先學によつて指摘されている。<sup>(7)</sup> 諸監牧に對する監督體制の展開については、『唐會要』卷六六群牧使の條に詳しい。

貞觀十五年、尙乘奉御張萬歲、太僕少卿に除せられ、群牧を勾當するも、官銜に入れず。麟德元年十二月に至り、官を免ぜらる。三年正月、太僕少卿鮮于正俗、隴右群牧監を檢校す。銜に入ると雖も、未だ使を置かず。上元元年四月、右衛中郎將邱義、檢校隴右群牧監に除せらる。儀鳳三年十月、太僕少卿李思文、隴右諸牧監使を檢校す。茲自り始めて使號有り。

太僕少卿であった張萬歳は、貞觀十五年（六四二）に至つて初めて諸監牧の監督を命じられたのであるが、當時、特にそのための官職が設けられることはなかった。その後、儀鳳三年（六七八）に李思文が隴右諸牧監使を檢校することになり、ここに初めて隴右一帯の諸監牧を統轄する使職が設置されることとなったのである。この隴右諸牧監使は、隴右群牧使とも別稱され、あるいは都監牧使・群牧大使・群牧都使・監牧都使などとも稱されたといふ<sup>(8)</sup>。以後、本稿では「隴右群牧使」に名稱を統一し、隴右群牧使が管轄した官營牧場（監牧）全體を「隴右群牧」と總稱する。

隴右群牧使の下には監牧使という使職が置かれ、より直接的に諸監牧の監督に當つた。先引の「監牧頌」文中の「八使」がこれに當たる。また『元和郡縣圖志』卷三關內道三原州には、

監牧。貞觀中、京師の東、赤岸澤自り馬牧を秦渭二州の北、會州の南、蘭州狄道縣の西に移し、監牧使を置きて其の事を掌らしむ。仍りて原州刺史を以て都監牧使と爲し、以て四使を管<sup>+</sup>べしむ。南使は原州の西南一百八十里に在り、西使は臨洮軍の西二百二十里に在り、北使は理を原州城内に寄せ、東宮使は理を原州城内に寄す。天寶中、諸使共に五十監有り。南使十八監を管べ、西使十六監を管べ、北使七監を管べ、東宮使九監を管ぶ。

とあり、南使・西使・北使・東宮使という「四使」が擧げられている。それぞれが若干數の監牧の監督を擔當し、『唐六典』卷一七太僕寺に、

年終わる毎に、監牧使、孳課の數を巡按し、功過を以て相い除し、之が考課を爲す。

とあるように、毎年、監牧の長官である牧監たちの成績査定を行った。

以上のことから、隴右に布かれた監牧制は次のように圖式化される。

隴右群牧使——監牧使（四〜八使）——牧監（四八監）

隴右群牧使という使職によつて、隴右全體の監牧を統轄させるこのような官制が最終的に完成したのは、『唐會要』卷六六群牧使の記載から、隴右群牧使が設けられた儀鳳三年（六七八年）のこととわかる。ただし、「隴右群牧」が設置された



範圍には注意を要する。<sup>(9)</sup>「隴右」という地名を冠しているが、「監牧頌」や『元和郡縣圖志』卷三關内道三原州に見えるように、當初監牧が設置された地域は渭州・蘭州・原州・秦州の四州であり、實際には隴右道東部から關内道西部にかけての一帯に位置する。その後、それだけでは土地が足りなくなり、さらに嵐州や鹽州というオルドス一帯（つまり「河曲」）にも監牧が増設されていたのである。<sup>(10)</sup>

これらの事項をふまえ、次章より表一に挙げた各事例について具體的に検討していく。

## 二 夏州群牧と武威安氏

まず、隋末唐初の中國において最大のソグド人勢力であった武威安氏の事例から見ていきたい。

表一③の安元壽は、李軌政權轉覆に功績のあつた安興貴の子である（武威安氏系譜については末尾の図一「武威安氏系圖」参照）。『兩唐書』には名が見えないが、光宅元年（六八四）に刻された墓誌が一九七二年に出土し、その事績を追うことができる。<sup>(11)</sup>それによれば安元壽は、武德五年（六三二）に一六歳で李世民的幕府である秦王府に仕え、武德九年（六二六）の玄武門の變にも加擔した。その直後に突厥・頡利可汗が長安北郊に襲來した際も、安元壽は腹心として李世民的傍らにあり、李世民と突厥の使者が會見する場に一人立ち會つた。太宗が即位した後は一時的に官を離れて歸郷したが、十數年のち再び登用され、高宗朝では武官職を歷任した。西突厥の阿史那賀魯に對する征討などに從軍し、最終的に官は右威衛將軍（從三品）に達した。死後は「太宗の功臣」として昭陵への陪葬を許されている。

ところが、詳細に安元壽の事績を綴るこの墓誌は、彼が夏州群牧使の職にあつたことには一言も觸れない。これに言及しているのは、『唐會要』卷七二馬の條である。

永隆二年七月十六日、夏州群牧使安元壽奏して言えらく、「調露九（元の誤り）年九月從り已後二月五日に至る前、死失の馬一十八萬四千九百匹、牛一萬一千六百頭」と。

この記事は、永隆二年（六八二）に夏州群牧使の安元壽が、調露元年（六七九）九月から永隆二年二月五日に至る約一年半の期間に喪失した牛馬の頭數を報告した、と傳える。ほぼ同文の記載が『冊府元龜』卷六二一卿監部・監牧や『資治通鑑』卷二〇二唐紀一八開耀元年（六八二）七月條にも見えるが、安元壽が夏州群牧使の職にあつたことを傳えるのは、これら斷片的な記事に限られる。さらには、「夏州群牧使」という使職名自體、この安元壽奏上に關する記事の他には見えない。『群牧使』の用例を諸史料から檢索した寧志新氏によれば、夏州群牧使以外に、州名を冠した群牧使の語の用例はないといふ。<sup>(12)</sup>

それでは、このわずかな資料から夏州群牧使なる職はどのように分析され得るであろうか。その鍵となるのは、安元壽が報告している喪失した軍馬の頭數である。この頭數は、夏州群牧使の統轄する監牧の規模、すなわちその權限の大小に關わってくる。『資治通鑑』卷二〇二唐紀一八開耀元年七月條には、

夏州群牧使安元壽奏すらく、「調露元年九月自り以來、喪馬一十八萬餘匹、監牧の吏卒の虜の殺掠する所と爲る者八百餘人」と。

とあり、これに對する胡三省の注釋には、

唐の諸牧監は、群牧孽課の事を掌る。凡そ諸群牧、南北東西四使を立て以て之を分統し、其の馬皆印さる。歲終わる毎に、監牧使は巡りて孽數を按じ、功過を以て相い除し、之が考課を爲す。此れ止だ夏州の喪失せし所の數なるのみとある。胡三省は一八萬を超える軍馬の喪失を、夏州一州における損害と見なしている。胡三省と同じく、この喪失數を夏州一州のものと思はす立場をとるのが、寧志新・七小紅兩氏である。寧氏は、夏州群牧使を、夏州が設置した（隴右群牧使とは別系統の）群牧使と見なし、安元壽奏上に見える喪失馬の數の大きさから、當時、夏州が隴右に次ぐ第二の軍馬飼養地帶であつたとする。<sup>(13)</sup>

一方で、七氏は、夏州に獨立した群牧が存在したとは見ない。氏は唐の監牧制の展開を①原州設置當初（貞觀一五年

(六四一)以前、②隴右群牧使統轄期(貞觀一五年～麟德元年(六六四))、③オルドスへの監牧擴大期(麟德年間以後(六六四～)、④八馬坊増設期(開元年間初め(七二三))の四段階に分け、この軍馬喪失を③の時期の出来事ととらえる。すなわち、先引の「監牧頌」に、

隴西・金城・平涼・天水四郡の地に跨り、幅員千里、猶隘狹と爲すがごとし。更めて八監を析き、河曲に布く。豐曠の地、乃ち能く之を容る。

とあり、また『新唐書』卷五〇兵志に、

其の後益して八監を鹽州に、三監を嵐州に置く。鹽州使は八、白馬等の坊を統ぶ。

とあるように、麟德年間以後、鹽州・嵐州にも監牧と監牧使が置かれ、監牧制はオルドスの東西へ擴大されていく。七氏は、鹽州使(鹽州監牧使)管轄下の八監が増設された時、いくつかの監牧は夏州に設置されたとし、それが突厥や吐蕃の侵掠を受けた結果、永隆二年(六八二)の損害に至ったと見る。<sup>(14)</sup>しかし、この解釋によれば、夏州に置かれた監牧はきわめて小規模のものと判断され、永隆二年報告の損害数の大きさに矛盾が生じる。また、夏州群牧使が結局いかなる使職であるのかという点については言及がなされていない。

右の見解に對し、この喪失数を夏州に限らず、唐の監牧全體の損害と見るのが横山貞裕・王世平の兩氏である。横山氏は、『冊府元龜』卷六二卿監部・監牧では、「永隆二年七月、夏州群牧使安元壽等奏すらく、……」とあり、奏上者を「夏州群牧使安元壽等」に作ることに注目する。氏はこれを「他の群牧使の分をまとめた報告の表現」と見なし、喪失馬の頭数を「獨り夏州のみでなく他の群牧使等の總計」と推察する。<sup>(15)</sup>ただし、寧氏によれば、この安元壽奏上の當時、群牧使と稱される使職は隴右群牧使と夏州群牧使以外には檢出されないようである。<sup>(16)</sup>

一方、具體的な數値の比較から検討したのが王世平氏である。王氏は「監牧頌」に擧げられる唐朝の軍馬の保有總數に注目する。唐代馬政の最盛期と謳われる麟德年間では「七十萬六千匹」、また開元元年の時點では「二十四萬匹」と頭數

が明記される<sup>(17)</sup>。安元壽奏上の永隆二年はその中間に屬するが、兩時期の軍馬の總數と比較すると、安元壽が奏上した喪失數の約一八萬という數は、唐全體の軍馬保有數の二六%から最大七五%を占めることになる。しかも、安元壽報告の頭數はあくまでも「喪失數」で、實際の保有數はもっと多いはずであるから、夏州群牧の軍馬が唐全體の軍馬數に占める比率はさらに高くなる。したがって、これを夏州一州の損失と見ることはできない、と述べる<sup>(18)</sup>。確かに、先引の『唐六典』や天聖令殘本中の唐令に見える監牧設置規定に従うならば、およそ一八萬五千頭もの軍馬は、單純に計算しても上監三七箇所分に相當する。それほど軍馬が全て夏州に集中したと見るのは、やはり不自然と言わざるを得ない。

そもそも、この奏上に報告される大量の軍馬損失は、いかなる原因に因るものであろうか。唐長孺氏によれば、それは調露元年（六七九）に始まる突厥の復興運動であるという<sup>(19)</sup>。これについては『舊唐書』卷一九四上突厥傳上に記載がある。

調露元年、單于管内の突厥の首領阿史德溫傳・奉職の二部落始めて相率いて反叛し、泥熟匁を立てて可汗と爲し、二十四州並に叛して之に應ず。高宗、鴻臚卿蕭嗣業、右千牛將軍李景嘉を遣わし衆を率いて之を討たしむも、反つて溫傳の敗る所と爲り、兵士の死せる者萬餘人。又禮部尚書裴行儉に詔して定襄道行軍大總管と爲し、太僕少卿李思文、營州都督周道務等を率いて衆三十餘萬を統べ、討ちて溫傳を撃たしむ。大いに之を破り、泥熟匁其の下の殺す所と爲り、并せて奉職を擒として還る。永隆元年、突厥又頡利の從兄の子阿史那伏念を夏州に迎え、將に河を渡り立てて可汗と爲さんとし、諸部落復た響應して之に従う。又裴行儉に詔して將軍曹繼叔、程務挺、李崇直、李文暉等を率いて之を討たしむ。伏念窘急し、行儉に詣りて降る。行儉遂に伏念を虜として京師に詣り、東市に斬る。

まず、調露元年、定襄都督府管内の阿史德溫傳と阿史德奉職が、舊東突厥の王族阿史那泥熟匁を擁立して唐に反旗を翻した。これに突厥の降戸から成る二十四州が呼應したため、唐側は、「唐の世の出師の盛んなること、未だ之有らざるなり」（『舊唐書』卷八四裴行儉傳）と評されるほどの大兵力を投入し、ようやくこれを鎮壓した。ところが、この時生き延びた阿

史德溫傳が、永隆元年（六八〇）に再び阿史那氏の一人を立て突厥の復興に挑んだ。これも結局は裴行儉に鎮壓されて終わるが、夏州から始まったこの蜂起は『舊唐書』卷五高宗紀下に、

（永隆）二年春正月、突厥、原・慶等の州を寇す。乙亥、將軍李知十・王杲等に命じ兵を分かちて之を禦がしむ。

とあるように、隴右群牧が置かれている原州一帯にまで波及している。したがって、この突厥蜂起を安元壽奏上に見る軍馬損失の背景と見るならば、そこで報告される損害数は、やはり夏州一州に止まらず、隴右群牧を含む監牧全體の損害と見るのが妥當であろう。

とすると、注目しなければならないのは、二度の突厥蜂起による監牧全體の損害を、夏州群牧使たる安元壽が代表して報告したという点である。前節で見たように、貞觀年間に監牧制を施行して以來、その中心は「隴右」（實際には隴右道東部から關内道西部）に在った。それにも関わらず、隴右群牧の統轄者である隴右群牧使ではなく、夏州群牧使安元壽が報告を行ったということは、彼がそうするだけの権限を持っていたためと考えられよう。假に、横山氏が指摘したように、報告者を「夏州群牧使安元壽等」とする『冊府元龜』卷六二一の記載が、より原史料に沿った記述であるとしても、安元壽が報告者の代表とされていることに変わりはない。

右の點に注目した王世平氏は、夏州群牧使の實態について次のように推論する。第一に、夏州群牧使と隴右群牧使には地位上に差が無く、夏州群牧（夏州群牧使統轄下の諸監牧）は隴右群牧と並ぶ一つの獨立した系統の群牧であること、第二に、夏州群牧使の統轄範圍は夏州一州に止まらず「北河之曲」（オルドス）に及び、鹽州・嵐州の二監牧も統轄下に置いた可能性があること、そして、第三に、夏州群牧の設置期間は、麟德以後の監牧擴大期から突厥蜂起による損害を被るまでの短期間と考えられ、それ故に安元壽一人の任命例しか見られないということ、以上の三點である。そして、王氏は特に第三の點を重視し、「唐代馬政における夏州群牧の影響は大きくない」と結論付けている。<sup>(20)</sup>

右の王氏の三點の推論は、まさに卓見であると思われる。しかし、短期間にせよ、オルドスに隴右群牧にも匹敵する監

牧體制が設置され、その統轄者が監牧制全體を代表したであろうという點を輕視すべきではない。しかも、その統轄者に任じられたのが、當時最大の中國在住ソグド人一族の出身者であつたとなれば、改めてその背景と意義を検討する必要があるでしょう。

では、安元壽が夏州群牧使に任じられた背景とは何であろうか。

第一に當時の夏州が置かれていた狀況が擧げられる。安元壽奏上の原因となる突厥復興運動が始まった調露元年は、オルドスに六胡州が設置された年でもある。『新唐書』卷三七地理志一關內道に、

調露元年、靈・夏の南境に降突厥を以て魯州、麗州、含州、塞州、依州、契州を置き、唐人を以て刺史と爲す。之を六胡州と謂う。

と記されるように、唐は、靈州・夏州の南境にいた「降突厥」、すなわち突厥の降戸集團をもつて六胡州を置き、唐人を以て刺史としたという。ところが、六胡州に對するこれまでの諸研究から、「降突厥」が實はソグド人集團に他ならないことが明らかにされている。<sup>(21)</sup>これらのソグド人は、かつて東突厥の内部に入植し、貞觀四年（六三〇）の頡利可汗敗北とともに唐に移住してきた者達の子孫であると考えられている。その多くが突厥人と混血し、あるいは遊牧文化を受容して突厥化したと見られることから、近年、特に「ソグド系突厥」の名で呼ばれる。<sup>(22)</sup>前掲『唐會要』の安元壽自身の奏上内容から、安元壽が夏州群牧使に任じられたのは六胡州が置かれた調露元年以前、「ソグド系突厥」の集團がまだオルドス南部に散居していた頃と推測される。夏州を中心とするオルドスへ監牧を擴大することは、當然、これらの「ソグド系突厥」の集團との接觸あるいは衝突の可能性を孕む。そうした狀況下で、ソグド人勢力家の一員である安元壽が登用されることになったのではなからうか。

武威安氏はソグド系突厥には屬さないものの、突厥を始めとする遊牧勢力の事情にも精通した一族であり、唐と北方勢力との交渉のあらゆる場面にその姿を見せている。武德八年（六二五）、唐が突厥との決戦に備えて關中十二軍を設置する

と、安元壽の叔父・安修仁は一軍を擔う軍將に任じられた。<sup>(23)</sup> 唐に敗北した頡利可汗が内附を求めた時、鴻臚卿唐儉とともにその下へ派遣されたのも彼であった。また、貞觀二〇年（六四六）、唐が薛延陀を打倒すると、回紇を始めとする鐵勒諸部が一齊に唐へ入朝した。この時、鐵勒諸部への答禮使に遣わされたのが安修仁の子の安永壽であった。<sup>(24)</sup> 安元壽に關しても、先述したように、武德九年の突厥襲來の折、頡利の使者と會見する太宗に一人陪從しており、兩者の間に立ち通譯を務めたのではないかと推測される。さらに「安元壽墓誌」には、

後に恩敕を奉じ、公をして充てて西域に使いし、東羅可汗を冊拜せしむ。

とある。「東羅」は「同羅」の誤記と思われる。時期は貞觀一四年（六四〇）以後、永徽元年（六五〇）以前としかわからないが、安元壽も鐵勒諸部の一つに使者として派遣されていることがわかる。このように武威安氏は、唐と北方勢力との交渉において常に重要な任務を擔った一族であった。<sup>(25)</sup> オルドスへの監牧擴大を企圖した唐にとって、ソグド・遊牧勢力雙方に通じる武威安氏は、その統括者としてうってつけの人材と映ったことであろう。

さらに、武威安氏の夏州群牧使就任の直接的な背景として、右の要因以上に検討を要するものとして、武威安氏の「家業」の問題を指摘したい。「安元壽墓誌」には、

（貞觀）三年に至り、涼公（安興貴）<sup>（26）</sup> 以えらく、河右は初賓にして、家業は殷重たり、と。表して公（安元壽）の貴に歸り檢校せんことを請うや、詔有りて聽許す。公、鄉曲に優遊すること十有餘年。

という記述が見える。安元壽は玄武門の變に加擔し、「太宗即位」の功臣となったにも関わらず、貞觀三年（六二九）に官職を擲って武威へ歸郷した。それは父・安興貴の意向を受けて「家業」を維持するためであり、以後十數年もの間、郷里に留まった。この「家業」こそが、武威安氏隆盛の原動力と考えられており、從來それは商業であるとされてきた。<sup>(26)</sup> 筆者自身も、武威安氏が代々薩寶を繼承してきたことから、先稿ではこれを東西交易と見なした。<sup>(27)</sup>

ところが、安興貴の四代後の子孫である李抱玉の列傳『舊唐書』卷一三二李抱玉傳の冒頭に、突然、武威安氏が代々馬

の生産に携わってきたことを伝える記述が現れるのである。

李抱玉、武徳の功臣安興貴の裔なり。代々河西に居り、善く名馬を養い、時の稱する所と爲る。

さらに、『新唐書』卷一三八李抱玉傳にも同様に、

李抱玉、本は安興貴の曾孫、世々河西に居り、善く馬を養う。

とある。兩書とも武威安氏が商業に携わってきたとは傳えていない。この李抱玉傳の記載に注目した森安孝夫氏は、武威安氏の「家業」には東西交易だけではなく、馬の飼育と賣買が含まれていたのではないかと指摘した。<sup>(28)</sup> そうであるとすれば、安元壽が夏州群牧使に任じられた直接の背景が、その「家業」にあったと考えられる。しかし、武威安氏が河西で馬産に携わったことを示す記事は、右の李抱玉傳を除くと、『兩唐書』を含め史書上には一切見られない。とすると、複数の史料から武威安氏が河西で馬産に携わっていたこと裏付けた上で、それはいつ頃から行われていたのかという問題と、その馬産が「家業」としての私的な馬産であったのか、單に監牧等の牧馬官に就いたことを指したのか、という問題を明らかにする必要がある。これらの疑問を解く手がかりを與えてくれるのが、次に取り上げる「河西節度副大使安公碑銘」、すなわち表一⑤安忠敬の事例に關する史料である。

### 三 「安忠敬墓碑」に見る武威安氏の牧馬

本節で取り上げる「河西節度副大使安公碑銘」（以下「安忠敬碑」と略稱）は、安興貴の曾孫にあたる安忠敬の墓碑銘であり、撰者は玄宗朝前半の名宰相として名高い張説である。墓碑序文に據れば、安忠敬は開元一四年（七二六）に六六歳で没し、翌年一族の墓地に埋葬されたところなので、本墓碑銘が撰述されたのも開元一五年と見られる。本墓碑銘は四部叢刊所收『張説之集』卷一六、四庫全書所收『張燕公集』卷一九、『文苑英華』卷九一七、『全唐文』卷二三〇等に收められ、表題や本文の字句に若干の異同が見られる。本稿では四部叢刊所收『張説之集』に據り、異同については註にて指摘する。



さて、序文の冒頭に安忠敬に至るまでの武威安氏の系譜が示されるとともに、撰者張説が武威安氏をいかなる一族と見ていたかが提示される。まず系譜について掲げよう。

公、諱は忠敬、字は某、武威の人なり。……高祖何藏器、廣宗の子なり。周の開府儀同三司・寧遠將軍・肅州刺史・張掖郡公たり。曾祖羅方大、隋の開府儀同三司・皇朝の贈石州刺史、貴郷公たり。祖興貴、右武侯大將軍・涼州刺史、封を榮涼歸三國公に徙さる。考文生、仕えず。

これによれば安忠敬は安興貴の孫ということになるが、『新唐書』卷七五下宰相世系表五下武威李氏には、次の系譜が見える。

興貴、左武侯大將軍、歸國宣公——恆安——文成——忠敬、松郡會三州都督

文成は墓碑中の文生と同一人物と見られるから、文生の父は興貴ではなく恆安であり、安忠敬は安興貴の曾孫とするのが正しいようである。このことはすでに吳玉貴氏によつて指摘されている。<sup>(29)</sup>問題となるのは系譜に續く次の部分である。

涼公、皇運經綸するや、首め李軌を平らげ、大いに河湟の地を擧げ、遠く城郭の國に通ず。寵錫は蕃庶にして、等夷に冠絶す。水は渥洼の神を出だし、文馬は二千乗、山は崆峒の武を得て、朱輪は四十人。公、榮盛の門に育ち、豪爽の氣に鬱る。

冒頭の「涼公」とは安興貴を指す。「公、榮盛の門に育ち」以下は安忠敬の事績が縷述されていくので、「涼公」から「朱輪は四十人」までは、武威安氏が唐に歸屬して以後の事績を略述したものと見て良いであらう。注目すべきは傍線部である(原文「水出渥洼之神、文馬者二千乗、山得崆峒之武、朱輪者四十人」)<sup>(30)</sup>。前半部分の「渥洼」とは、李正宇氏に據れば敦煌の西南に位置した湖の名稱であり、また、「文馬」とは、飾り立てた馬あるいは毛に文采の有る馬を言う。この一節は前漢武帝の時に渥洼で「神馬」が発見されたという『史記』卷二四樂書の記事に因んでいる。

又嘗て神馬を渥洼水中に得たり。復た次いで以て太一の歌を爲る。歌曲に曰く、「太一は貢いて天馬下る。赤汗に霑

い沫<sup>あわ</sup>流<sup>なが</sup>れて緒<sup>しや</sup>たり。馳<sup>は</sup>すること容<sup>ゆる</sup>與<sup>あ</sup>として萬里を蹴<sup>ふ</sup>ゆ。今安<sup>やす</sup>くんぞ匹<sup>ひつ</sup>せん龍<sup>りゆう</sup>を友<sup>とも</sup>と爲<sup>な</sup>す」と。後に大宛<sup>だい宛</sup>を伐<sup>は</sup>ちて千里馬<sup>せんりば</sup>を得<sup>え</sup>たり。

渥<sup>お</sup>注<sup>しや</sup>より神馬<sup>しんば</sup>の如<sup>ごと</sup>き駿馬<sup>しゅんば</sup>を得<sup>え</sup>た武帝<sup>むてい</sup>が、「太<sup>たい</sup>一<sup>いつ</sup>」の歌<sup>うた</sup>を作りそれ<sup>それ</sup>を祝<sup>いわ</sup>つたという。『史記』では年代<sup>ねんたい</sup>が記<sup>し</sup>されないが、『漢書』では、卷六武帝紀<sup>むていき</sup>に元鼎四年<sup>げんていしやねん</sup>（前一一三）、卷二禮樂志<sup>れいらくし</sup>に元狩三年<sup>げんしゆしやねん</sup>（前二二〇）とある。この故事<sup>ここのこと</sup>をふまえると、前半部分<sup>はんぱんぶぶん</sup>の文意<sup>ぶんい</sup>は「（神馬<sup>しんば</sup>を出<sup>だ</sup>した）渥<sup>お</sup>注<sup>しや</sup>より靈力<sup>れいりき</sup>が授<sup>おづ</sup>けられ、（産<sup>う</sup>み出<sup>だ</sup>した）飾<sup>し</sup>り馬<sup>ば</sup>は二千乗<sup>にせんじやう</sup>にもおよぶ」となる。つまり、武威安氏<sup>むいあんし</sup>が河西<sup>かへい</sup>で馬産<sup>ばさん</sup>の業績<sup>しよくせき</sup>を舉<sup>あ</sup>げたことを讃<sup>ほめ</sup>えた一節<sup>いちせつ</sup>となる。

一方、後半部分<sup>はんぱんぶぶん</sup>の「崆峒<sup>くどう</sup>」とは崆峒<sup>くどう</sup>（空同<sup>くどう</sup>）山<sup>さん</sup>を指<sup>さ</sup>し、『莊子』在宥篇<sup>ざいうへん</sup>で黃帝<sup>わうてい</sup>が廣成子<sup>くわうせいし</sup>に道<sup>みち</sup>を問<sup>と</sup>うた場所<sup>ばしょ</sup>とされる。

黃帝<sup>わうてい</sup>立ち天子<sup>てんし</sup>と爲<sup>な</sup>りて十九年<sup>じゅうくしやねん</sup>、令<sup>しるし</sup>は天下<sup>てんか</sup>に行<sup>い</sup>わる。廣成子<sup>くわうせいし</sup>の空同<sup>くどう</sup>の上<sup>のうへ</sup>に在<sup>あ</sup>るを聞<sup>き</sup>き、故<sup>ゆゑ</sup>に往<sup>い</sup>きて之<sup>これ</sup>に見<sup>み</sup>えて曰<sup>いは</sup>く、……。

さらに、右<sup>みぎ</sup>の「空同<sup>くどう</sup>」に對<sup>たい</sup>し、郭象<sup>かくしやう</sup>が次のように注釋<sup>しゆしやく</sup>している。

空同<sup>くどう</sup>は北斗<sup>ほくとう</sup>の下山<sup>かふざん</sup>に當<sup>あた</sup>たるなり。爾雅<sup>に</sup>に云<sup>い</sup>えらく、北<sup>きた</sup>して斗極<sup>とうごく</sup>に戴<sup>おさ</sup>るを空同<sup>くどう</sup>と爲<sup>な</sup>す、と。

そこで、『爾雅』を見ると卷七釋地<sup>しやくち</sup>に次のようにある。

齊州<sup>せいしゅう</sup>を峍<sup>さ</sup>り南<sup>みな</sup>して日<sup>ひ</sup>に戴<sup>おさ</sup>るを以<sup>もつ</sup>て丹穴<sup>たんけつ</sup>と爲<sup>な</sup>し、北<sup>きた</sup>して斗極<sup>とうごく</sup>に戴<sup>おさ</sup>るを空同<sup>くどう</sup>と爲<sup>な</sup>し、東<sup>あづま</sup>して日<sup>ひ</sup>の出<sup>で</sup>づる所<sup>ところ</sup>に至<sup>いた</sup>るを太平<sup>たいへい</sup>と爲<sup>な</sup>し、西<sup>にし</sup>して日<sup>ひ</sup>の入<sup>い</sup>る所<sup>ところ</sup>に至<sup>いた</sup>るを大蒙<sup>たいもう</sup>と爲<sup>な</sup>す。太平<sup>たいへい</sup>の人は仁<sup>に</sup>たり、丹穴<sup>たんけつ</sup>の人は智<sup>ち</sup>たり、大蒙<sup>たいもう</sup>の人は信<sup>しん</sup>たり、空同<sup>くどう</sup>の人は武<sup>ぶ</sup>たり。

この條は四方僻遠<sup>しやうへきえん</sup>の地の名稱<sup>なめい</sup>と各地<sup>ここのち</sup>の人の性質<sup>しやうしやう</sup>について述<sup>の</sup>べる。崆峒山<sup>くどうさん</sup>（空桐<sup>くどう</sup>）は北方<sup>ほくぱう</sup>の地で北斗<sup>ほくとう</sup>の眞下<sup>ました</sup>に位置<sup>ち</sup>し、人の性質<sup>しやうしやう</sup>は「武<sup>ぶ</sup>」とされる。これが後半部分<sup>はんぱんぶぶん</sup>の「崆峒<sup>くどう</sup>の武<sup>ぶ</sup>を得<sup>え</sup>て」の典據<sup>てんこ</sup>である<sup>(32)</sup>。また、「朱輪<sup>しゆりん</sup>」は貴人<sup>きじん</sup>が乗<sup>の</sup>る車<sup>くるま</sup>を指<sup>さ</sup>し、漢代<sup>わんだい</sup>には二千石<sup>にせんしやく</sup>の吏<sup>し</sup>は馬車<sup>ばしや</sup>の兩輪<sup>りやうりん</sup>を朱塗<sup>しゆと</sup>りにし、千石<sup>せんしやく</sup>から六百石<sup>りくはくしやく</sup>の者は左輪<sup>さりん</sup>を朱塗<sup>しゆと</sup>りしたことに基<sup>もと</sup>づく。したがって、後半部分<sup>はんぱんぶぶん</sup>の文意<sup>ぶんい</sup>は、「崆峒山<sup>くどうさん</sup>より武才<sup>ぶさい</sup>を得<sup>え</sup>て、（武勳<sup>ぶくん</sup>を上げて）朱輪<sup>しゆりん</sup>に乗<sup>の</sup>るような高官<sup>こうかん</sup>に達<sup>いた</sup>した者は四〇人<sup>しやうじゆにん</sup>にも至<sup>いた</sup>る」となり、

武威安氏の武勇を讃える一節となる。

以上の検討から、張説が、唐に歸屬した後の武威安氏を、馬産と軍事の功績によって榮華を築いた一族と見なしていたことがわかる。張説は本墓碑を撰述する二年前の開元一三年に「監牧頌」を撰述しており、唐の馬政に通曉していたことであろう。また、しばしば玄宗に吐蕃對策の意見を上奏したり、開元初期に對吐蕃の最前線で活躍した郭知運の墓碑銘を撰述するなど、河西の事情にも通じていたと見られる。したがって、張説が本墓碑銘で下した武威安氏に對する評價の信憑性は高いと判斷され、これを『兩唐書』李抱玉傳冒頭の記載を裏付ける史料と見なして良いであろう。

では、その馬産とは、私的な生業として行われていたのか、監牧等に就任して官營牧場を運營したことを指すのか、果たしてどちらであろうか。前節までに見てきたように、唐の監牧制は隴右道東部から關内道西部の一帯にまず隴右群牧が設置され、それが麟德年間以降にオルドスへと擴大が圖られた結果、夏州群牧が増設されたのであった。つまり、武威安氏が據點とする河西一帯は、本來、唐の監牧制の空白地帯だったのである。それにも関わらず、『兩唐書』李抱玉傳が「代々河西で名馬を養った」と述べ、「安忠敬碑」が唐歸屬以後の事績として河西での牧馬を筆頭に擧げているということは、武威安氏が監牧制の枠外で、つまり、私的に牧馬を營んできたことの證左に他ならない。そして、安元壽が夏州群牧使——當時の監牧制にとって要となる任務——に任用されたのが、武威安氏が持つ牧馬の技能を期待されたものであったとすると、遅くともその前代の安興貴・修仁兄弟の代には營まれていたと見るべきであろう。すなわち、安興貴が太宗の功臣となった息子を、歸郷させても維持しようとした「家業」とは、牧馬であったと結論されるのである。

續けて、安忠敬の牧馬官就任の背景について検討しておこう。安忠敬が唐の官途に就いたのは遅く、四〇歳の時のことであり、吐蕃征討に派遣された遠征軍の將帥による登用であった。「安忠敬碑」には、

始め良家子を以て、僕射韋公待價、張下に引く。安息軍に奇績を建て、褐を解きて游擊將軍・臨洮府右果毅を授けらる。復た部統に善しきを以て、御史大夫唐公休璟、之を前鋒に處す。洪源谷に異效を立て、右威衛翊府右郎將に遷り、

新泉軍使を兼ね。

とある。韋待價は永昌元年（六八九）に安息道行軍大總管に任じられ吐蕃遠征を行った人物であり、唐休璟は韋待價が敗北した後、西州都督としてその殘存部隊を統括した人物である。「洪源谷に異效を立て」とは、唐休璟が久視元年（七〇〇）に涼州に侵寇した吐蕃軍を撃退した出來事を指す。このように、唐と吐蕃との攻防戦の中で登用された安忠敬は、その後も吐蕃との境界地帯を統轄する職に任じられ、會州刺史、松州都督防禦使、鄯州都督、河西節度副大使等を歴任した。その官歴の中で、赤水・新泉兩軍監牧使という牧馬官を兼任している。先引の「安忠敬碑」に續けて、次の一文がある。

本衛中郎將・赤水軍副使に進み、赤水・新泉兩軍監牧使を兼ね<sup>(33)</sup>。

年代は明記されないが、寧志新氏が『元和郡縣圖志』卷四關內道四會州會甯縣の條に、

黃河堰。開元七年、河流漸く州城に逼る。刺史安忠敬、團練兵を率い起こして作る。

とあり、開元七年（七一九）には安忠敬が次の官職である會州刺史に遷っていたことを指摘している。したがって、その期間には吐蕃の涼州侵攻が起きた久視元年以降、開元七年以前となる。

赤水・新泉の兩軍については、『元和郡縣圖志』卷四〇隴右道下涼州に記述がある<sup>(34)</sup>。

武德二年、李軌を討平して涼州と爲し、西河<sup>マ</sup>節度使を置く〔兵七萬三千人、馬萬八千八百匹を都管す〕。羌胡に備え、赤水軍〔涼州城内に在り。兵三萬三千、馬萬三千匹を管ぶ。本は赤烏鎮に青赤泉有り。焉れに名づく。軍の大なるものは赤水に如かず。幅員五千一百八十里、前は吐蕃を拒み、北は突厥に臨む者なり〕、……新泉郡<sup>マ</sup>〔會州の西北二百里、大足の初め、郭元振置く。兵七千人を管ぶ。西のかた理所を去ること四百里なり〕……を統ぶ。

赤水軍は最大規模の軍鎮であり、保有する軍馬も一萬三千頭に及ぶ。これは河西節度使全體の軍馬數の約七割を占める。『元和郡縣圖志』が伝える軍鎮の情報是天寶期のものであるが、河西節度使管内において赤水軍が最重要の軍鎮であったことは天寶年間以前においても變わりないであろう。安忠敬が任じられた赤水・新泉兩軍監牧使とは、兩軍鎮に供給す

る軍馬の生産を割り當てられた諸監牧を統轄する使職と考えられる。そして主要たる供給先の赤水軍は、涼州城内すなわち姑臧縣域内に置かれていたのであるから、赤水軍に軍馬を供給すべき監牧も姑臧周邊に位置していたと推測されよう。安忠敬が牧馬官に就任したのはこの一度のみであるが、「安忠敬碑」では邊境防備・屯田擴張と並ぶ功績の一つの柱として、牧馬の成果が繰り返し讃えられる。序文には、

其の農牧に在りては、田を大にし稼を多くすること、茨の如し梁の如し、思れ馬斯すなわち才あらん、驕すなわ有り皇すなわ有り。

とある。傍線部は『詩經』魯頌・駟の引用であり、魯の僖公による馬政の盛んな様子を讃えた一節である。文意は「この馬の才有ること限りなく、黒に白胯の模様の名馬有り、黄白の名馬有り」となる。また、銘文の第四には、

勇將時を知り、仁兵善く持す。耕に反りて戦を去るは、王者の師。牧馬雲の如く、屯庾坻の如し。

とある。この件は、河西一帯の防備にとって安忠敬が挙げた牧馬の功績がいかに大きいものであったかを示している。つまり、安忠敬の監牧使就任とは、唐が河西の防備を強化するための新たな監牧を設立するに当たり、當地で馬産を営んできた安氏にその運営を委託したものと見るべき事例であろう。

#### 四 固原史氏と監牧制

最後に、もう一つのソグト人集團である固原史氏による牧監の就任事例について検討しよう。<sup>(35)</sup> 先述したように、固原史氏の系譜は二つに分けられ、史射勿系と史索巖系が存在する(図二「固原史氏系圖」参照)。第一節に掲げた表一「ソグト人牧馬官就任事例」のうち、①史訶耽と②史鐵棒が史射勿系に屬し、④史道德が史索巖系に屬する。二つの系統は北朝末から唐初にかけて、それぞれに軍府官を歴任した。特に史索巖は、隋末に平涼郡都尉に任じられ、周邊の鷹揚府を統轄すると共に郡一帯の治安維持を任されている。<sup>(36)</sup>

さて、固原史氏による牧監就任の嚆矢となるのが、①史訶耽の左二監就任である。「史訶耽夫妻墓誌」(以下「史訶耽墓

誌」と略稱)には、

爰に肇めて君、遂に險阻を間行し、款を宸極に獻ず。義寧元年、上騎都尉に拜され、朝請大夫を授けられ、並びに名馬雜綵を賜る。特に敕して北門に進馬を供奉せしむ。武德九年、公の六閑に明敏なるを以て、別敕もて左二監を授けらる。奏課最を連ね、簡えばれて屢々聞せらるるに在り。

とある。義寧元年(六一七)、隴西の薛舉政權に對抗するため、固原史氏は史訶耽を派遣して唐への歸屬を申し入れた。史訶耽はそのまま長安で唐に仕えたが、武德九年(六二六)に左二監に任じられたという。ところが、第一節で見たように、「監牧頌」を始めとする傳世史料は、等しく唐の監牧制の開始を貞觀年間(六二七―六四九)としており、この「史訶耽墓誌」の記載とは矛盾する。また、「監牧頌」に「貞觀自り肇め、麟德に成り、四十年間」とあるが、麟德年間(六六四―六六六)から單純に四〇年を引くと武德年間に遡ってしまう。張説は、あくまで概數として「四十」を用いたと解釋するのが自然である。

おそらく、唐の監牧制は、玄武門の變後間もなくして李世民の手により施行されたのであろう。「史訶耽墓誌」は、その時期を玄武門の變による奪權直後の武德九年年内と見なし、一方の「監牧頌」は太宗の治世の正式な始まりである貞觀元年と見なしたことによって、異同が生じたのではなからうか。このように解釋すれば、兩史料間の記述の矛盾が理解できよう。

したがって、史訶耽の牧監就任は、唐の監牧制の開始とほぼ同時であつたと考えられる。それはまた、左二監という名稱(二番目に設置された良馬を産出する官營牧場の長官)から判明する設立順の早さからも傍證される。この牧監就任について「史訶耽墓誌」は、「六閑に明敏なるを以て」とし、史訶耽が馬の飼育に長けていたことを理由としている。しかし、そのような個人的資質のみが就任の背景ではあるまい。なぜなら、第一節で掲げた『元和郡縣圖志』卷三關内道三原州の記事が示すように、隴右に布かれた監牧制の中心が、まさに固原史氏一族の本據地たる原州に置かれていたという事實を

看過することはできないからである。隴右群牧を統轄する隴右群牧使は原州刺史が兼任し、その下に置かれた監牧使のうち北使と東宮使は、原州城内すなわち高平縣城に治所が置かれていた。もとより、このような體制が完成するのは、先掲『唐會要』卷六六の記事から儀鳳三年以後と見られるが、原州が隴右群牧の重要地であったことは設立當初も變わりないであろう。

そもそも、監牧制が施行された當初、唐が所有していた軍馬はわずかに三千（『監牧頌』）ないし五千頭（『新唐書』兵志）であった。第一節で見たとおり、この頭数は「中監」か「上監」の監牧一箇所分にしか相當しない。したがって、隴右に監牧を設立するに際し、唐の所有馬だけでは不足を來したに違ひなく、現地で私的に馬の飼育を營む者の協力が不可欠であったはずである。そうであれば、監牧制の施行と同時に左二監に任じられた史訶耽の一族は、武威安氏同様、私的に馬の飼養や貿易を營んでいた一族と推測され、左二監の牧場も原州に設立されたものと考えられよう。つまり、史訶耽の左二監就任とは、固原史氏が隴右群牧の設立に直接關與したことを示す事例なのである。

この本據地原州における固原史氏の官營牧場運営は、唐の高宗期においても繼續していた。②史鐵棒の事例について、「史鐵棒墓誌」に次のようにある。

顯慶三年、敕もて司馭寺右十七監を授けらる。趣馬は名官にして、駕人は司職たり。荆珍もて鵠こに抵て、牛鼎もて鷄けいを亨に、闕里は執鞭を思い、蒙邑は園吏に安んず。遂に乃ち理に觸れて用を宣べ、事に隨いて能を效す。牧養は其の方を妙盡し、服習は其の性に違わず、害群は斯に去り、逸足は遺す無し。

史鐵棒は高宗朝の顯慶三年（六五八）に右十七監という牧監に任じられている。一讀して、右十七監の牧場が何處に存在したかは判然としないが、傍線部の修辭文（原文「闕里思執鞭、蒙邑安園吏」）の一節を讀み解くと、それが明らかになるのである。まず、『史記』卷四七孔子世家の、

孔子の母死し、五父の衢に殯せしは、蓋し其の愼なり。

という一文に『史記集解』が注を附し、

徐廣曰く、「魯縣に闕里有り。孔子の居る所なり……」。

とあるように、前半部分の「闕里」とは、孔子の住居が在った場所である。また「執鞭を思う」の句は『論語』卷七述而編にある次の一節を引用したものである。

子曰わく、富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾亦之を爲さん。如し求むべからずんば、吾が好む所に從わん。

「執鞭」とは御者や露拂いのような下級の士を指す。ここでは、「富というものを追求してもよいなら、執鞭のような賤しい役目でもわたしはつとめようが、もし追求すべきでないなら、わたしの好きな生活に向かう」という孔子の考えが示されている。

一方、後半の「蒙邑は園吏に安んず」とは莊子の故事を指す。『史記』卷六三莊周傳に、

莊子は蒙の人なり。名は周。周は嘗て蒙の漆園の吏と爲る。

とあり、莊子が郷里の蒙で漆園の吏という低い身分に甘んじたとある。つまり「闕里」と「蒙邑」とはそれぞれ孔子・莊子を意味し、兩者のような傑出した人物であつても郷里で粗末な職に甘んじた、という文意になる。ここで喩えられる粗末な職とは、當然右十七監を指し、郷里でそれに就いたといふのであるから、史鐵棒が統轄した牧場も史訶耽の場合と同様、やはり原州に設立されたことが判明するのである。また、右十七監という監牧の名稱（十七番目に設置された粗雑馬を産出する官營牧場の長官）からは、隴右群牧において、設立當初から確實に牧場數が増加している状況がうかがえる。

さらに固原史氏は、麟徳年間以後のオールドスへの監牧擴大にも關與したと見られる。④史道德の事例について「史道德墓誌」に、

總章二年、給事郎に拜せられ、玉亭監に遷さる。……又龍朔三年、詔もて蘭池監に除せらる。



とある。第一節でふれたとおり、玉亭監・蘭池監は地名を冠していることから、下監と判断される。また、蘭池監への就任は龍朔三年（六六三）とあるが、龍朔は總章より前の年號であり誤記と思われる。墓誌ではこのあと儀鳳三年に史道徳が没したことが記されるので、正しくは、咸亨三年（六七二）か上元三年（六七六）であろう。それぞれの位置については、玉亭は諸史料から検出されず不明であるが、蘭池は、神龍三年（七〇七）に六胡州を統廢合して設置された蘭池都督府が想起されよう。『新唐書』卷三七地理志一關内道宥州寧朔郡の條に、

調露元年、靈・夏の南境に降突厥を以て魯州、麗州、含州、塞州、依州、契州を置き、唐人を以て刺史と爲し、之を六胡州と謂う。長安四年、併せて匡・長二州と爲す。神龍三年、蘭池都督府を置き、六州を分かちて縣と爲す。

とある。『元和姓纂』卷四關内道四鹽州には、

神龍三年、復た蘭池都督府を置く。鹽州白池縣の北八十里に在り。

とあり、蘭池都督府が鹽州近隣に置かれていたことは疑いない。固原史氏一族墓誌を研究した羅豐氏は、史道徳が就任した蘭池監の位置をのちの蘭池都督府と同一と見なし、その設置時期がまさに監牧制のオールドス擴大期（麟德年間以後（六六四））に當たることに注目する。第二節で見たように、麟德年間以後、鹽州には八監すなわち八カ所の監牧が増設されている。このことから羅豐氏は、これら新設の監牧に對する管理を強化するために蘭池監が置かれ、史道徳が牧監に任じられたとする。<sup>(37)</sup>しかし、第一節・第二節で見たように、諸監牧を管理する職は監牧使や群牧使であり、史道徳が牧監に任じられた蘭池監自體は、鹽州に増設された「八監」と同じ一監牧にすぎない。つまり、蘭池監は「八監」の一つか、あるいは八監設立後さらに増設された監牧の一つと見るべきであり、史道徳が諸監牧の管理にあたったと見るのは適切ではない。

さて、右のように見てくると、固原史氏の牧監就任の經歷は、唐の監牧制擴大の歴史と見事に合致することに氣付くであろう。すなわち、監牧制施行時には史訶耽が左二監に、隴右群牧の發展期には史鐵棒が右十七監に、そしてオールドスへ

の監牧擴大期（夏州群牧設立期）には史道德が蘭池監に、それぞれ任じられている。このように、固原史氏は元來軍馬の飼養を營んでいたと見られ、監牧制の施行以後は一貫して、實地に馬の生産に携わる牧監を歴任した。つまり、固原史氏とは軍馬の生産と提供を通じて唐朝との關係を保ったソグド人と位置付けられるのである。

## む す び

從來、武威安氏・固原史氏に牧馬官の就任が見られることについては、その技能の由來が注目されるのみであった。例えば榮新江氏は、中國北方地域に生存したソグド人は突厥國內に生存したソグド人同様、突厥の影響を受け、牧馬に長ずるようになったと説く。<sup>(38)</sup> また羅豐氏は、中央アジアは良馬の産地であるから、元來ソグド人は牧馬技能を身に付けており、唐朝が彼らを牧監に用いたのも自然な選擇であったと述べる。<sup>(39)</sup>

しかし、本稿で論じたように、彼らが牧馬官に登用されたのは單にその技能を理由としたのではなく、彼ら自身が馬の生産を生業とする一族であったためであった。そして軍馬の生産・交易に携わったことによつて、必然的に軍事との關わりが深まったと考えられる。武威安氏を例にとると、「安元壽墓誌」に、

永徽年中に至り、賀魯の叛常にして、沙塞を驚擾す。貳師旅を振るい、將に氈裘の孽を蕩せん。五道塵を分かち、實に偏裨の伍に藉る。別に敕して公を差して葱河道檢校軍馬使に充つ。

とある。永徽六年（六五五）、西突厥の阿史那賀魯に對する征討に、安元壽が「葱河道檢校軍馬使」として從軍を命じられている。「軍馬使」の職名は他の史料から檢出されないが、おそらく軍馬調達を任務とした使職であろう。また、第三節で見た安忠敬においても、彼が赤水・新泉兩軍監牧使に任じられた際、同時に赤水軍副使にも任じられている。このように軍馬の生産・調達と軍事は元來密接な關係にある。つまり、軍馬生産を生業としていたことが彼らを武人化へと導き、やがて、彼らは武裝集團と化して軍府の形成を命じられるに至つたと考えられるのである。

以上、本稿で述べてきたことをまとめると、

(一) 武威安氏・固原史氏は、ともに唐成立以前から馬の生産と交易を生業としてきたソグド人一族である。

(二) 唐朝は監牧制の施行及びその擴大に当たり、馬産を営むソグド人を監牧の運営者あるいは諸監牧全體の統括者に登用して監牧制の充實を圖った。

(三) 武威安氏・固原史氏が、唐建國に直接影響を及ぼすほどの武裝集團と化したのは、彼らが軍馬の生産・交易に携わっていたことが背景にあった。

ということになる。

近年、森安孝夫氏は、ソグド集團が武裝集團と化すに至る経緯について、河西回廊・寧夏・オルドス・山西北部の農牧接壤地帯に進出したソグド人であれ、天山地方―モンゴリアの草原地帯に進出したソグド人であれ、大量に馬を保持することによって、馬を商品とし、馬とラクダの機動力を生かして東西交易に従事する一方、騎馬を中心として軍事力を備える武裝集團と化した、との見解を提示した。<sup>(40)</sup> この武裝集團化の経緯が中國在住ソグド人全てに當てはまるかは、今後さらに檢證を要するであろう。ただし、本稿で論じた武威安氏と固原史氏に「牧馬官」の歴任という共通した特色が見られる點は輕視すべきではない。森安氏の見解に本稿で得られた檢證の結果をあわせ見れば、兩集團がともに牧馬を經營していたことは決して偶然ではなく、牧馬こそが兩集團の北朝末から唐初における隆盛を導いた原動力であつたと見なされよう。

## 註

(1) 榮新江「中古中西交通史上的統萬城」(陝西師範大學西

北環發中心編『統萬城遺址綜合研究』三秦出版社、二〇〇

四、二九—三三頁) 三二頁。

(2) 武威安氏・固原史氏と軍府官との關係については、拙稿

「新出土史料より見た北朝末・唐初間ソグド人の存在形態

——固原出土史氏墓誌を中心に——」(『唐代史研究』七、

二〇〇四、六〇—七七頁)、「隋・唐初の河西ソグド人軍團——天理圖書館藏『文館詞林』「安修仁墓碑銘」殘卷をめぐって——」(『東方學』一一〇、二〇〇五、六五—七八頁)参照。

- (3) ⑥安祿山は周知の如く突厥人の血を引き、突厥第二帝國の内亂のさなかにモンゴリアから唐に逃れてきたとされる。森部豊氏は安祿山を後述の「ソグド系突厥」に分類している(同氏「八—一〇世紀の華北における民族移動——突厥・ソグド・沙陀を事例として——」『唐代史研究』七、二〇〇四、七八—一〇〇頁の八三頁)。したがって、安祿山は本稿が分析対象とする北朝末から唐初にかけて中國に入植したソグド人とは範疇を異にするので、分析の対象から外す。なお、安祿山の牧馬官就任の意義を考察したものに、馬俊民・王世平『唐代馬政』(聯合出版、一九九五、一四四—一五一頁(馬俊民著))がある。

- (4) 唐の監牧制に關する先行研究としては、濱谷秀雄『唐代馬政の一斑』(『日本大學文學科研究年報』三一三、一九三六、一〇—二四頁)、唐長孺『唐書兵志箋正』(科學出版社、一九五七)、宋常廉『唐代的馬政 上下』(『大陸雜誌』二九・一・二、一九六四、二九—三三頁・六一—六六頁)、橫山貞裕『唐代の馬政』(『國士館大學人文學會紀要』三、一九七一、一二七—一七五頁)、馬俊民・王世平『唐代馬政』、齋藤勝『唐代的馬政と牧地』(『日中文化研究』一四、一九九一、四四—五一頁)等がある。

- (5) 天一閣博物館・中國社會科學院歷史研究所天聖令整理課

題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附唐令復原研究』(中華書局、二〇〇七)。( )で示した校勘は同書「校録本」に據る。

- (6) 「監牧頌」は他に四部叢刊所收『張說之集』卷一一、『文苑英華』卷九一七、四庫全書所收『張燕公集』卷一一、『全唐文』卷二三〇等にも收載されるが、『張說之集』と『文苑英華』には文字の錯誤が多く見られる。

- (7) 宋常廉『唐代的馬政 上』二九—三〇頁、橫山貞裕『唐代的馬政』一五六頁。

- (8) 馬俊民・王世平『唐代馬政』一四—一六頁(王世平著)、寧志新『隋唐使職制度研究(農牧工商編)』(中華書局、二〇〇五)一七五—一七六頁。

- (9) 監牧の分布地域については馬俊民・王世平『唐代馬政』三九—四三頁(王世平著)。

- (10) 監牧制には、右に述べてきた監牧の他に、開元年間(七一三—七四一)の初めに新たに設けられた「馬坊」という官營牧場もあり、これは岐州・邠州・涇州・寧州に置かれた(「八馬坊」)『唐文粹』卷三二所載邵昂「岐邠涇寧四州八馬坊碑頌」。また唐の馬政機關には、「閑厩」と呼ばれる皇帝および宮廷が使用する御馬の飼養機關も存在するが、これらは本論に直接關係しないので省略したい。

- (11) 發掘報告は昭陵博物館「唐安元壽夫婦墓發掘簡報」(『文物』一九八八・一二、三七—四九頁)。また昭陵博物館・張沛編著『昭陵碑石』(三秦出版社、一九九三)に墓誌拓本寫真と錄文載録。

- (12) 寧志新『隋唐使職制度研究（農牧工商編）』一八二頁。
- (13) 寧志新『隋唐使職制度研究（農牧工商編）』一八一頁。
- (14) 七小紅『唐五代畜牧經濟研究』（中華書局、二〇〇六）四五—五一頁。
- (15) 橫山貞裕『唐代の馬政』一五八頁。
- (16) 寧志新『隋唐使職制度研究（農牧工商編）』一八一—一八七頁。
- (17) 王氏は四部叢刊所收『張說之集』卷二二所載の「監牧頌」に據っており、『唐文粹』では「七十萬匹」とある。麟德年間の馬の保有数が「七十萬六千匹」とある。
- (18) 馬俊民・王世平『唐代馬政』一六一—一八頁（王世平著）。
- (19) 唐長孺『唐書兵志箋正』一一五—一一六頁。
- (20) 注(18)に同じ。
- (21) 小野川秀美『河曲六州胡の沿革』（『東亞人文學報』一、四、一九四二、一九三—二二六頁、張廣達『唐代六胡州等地的昭武九姓』（『北京大學學報（哲學社會科學版）』一九八六・二、七一—八二・一二八頁）、周偉洲『唐代六胡州與“康待賓之亂”』（『民族研究』一九八八・三、五四—六三頁）。
- (22) 森部豊『唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀』（『東洋史研究』六二・四、二〇〇四、六〇—九三頁）。
- (23) 『冊府元龜』卷九九〇外臣部備禦三。
- (24) 『唐會要』卷九六鐵勒に、  
貞觀二十年、既に延陀を破り、太宗靈州に幸し、涇陽頓に次る。鐵勒の迴鶻、拔野古、同羅、僕骨、多濫葛、思結、阿跌、契丹、奚（契苾の誤り）、渾、斛薩等十一姓、各々使を遣わして朝貢す。……異日、鐵勒等を召して並びに行宮に入らしめ、樂を張り以て之を宴し、拜して郎將および昭武校尉等の官と爲す。乃ち璽書を降して其の酋長を勞い、綾錦等を齎すに及んで、以て將に意を厚くせんとす。仍りて乘輿と靈州に會せしめ、并せて右領軍中郎將安永壽をして往きて報ぜしむ。
- (25) 唐と突厥との交渉の場面にしばしば武威安氏が現れることについて、榮新江氏はこれを武威安氏と突厥との「相當に親密な關係」の現れととらえる（同氏『粟特與突厥——粟特石棺圖像的新印證』、周偉洲主編『西北民族論叢』四、中國社會科學出版社、二〇〇六、一—三三頁）。しかし一方で安修仁が關中十二軍の軍將に任じられている。また、『資治通鑑』卷一九一唐紀七武德八年條には次のような記事がある。  
夏四月……甲寅、涼州胡の陸伽陀、突厥を引きて都督府を襲い、子城に入る。長史劉君傑擊ちて之を破る。……六月……陸伽陀、武興（姑臧の西北）を攻む。……八月……左武侯大將軍安修仁、陸伽陀を且渠川（涼州）に擊ち、之を破る。  
武德八年（六二五）は唐への突厥の侵寇が激しさを増した時期であるが、突厥と手を結んだ「涼州胡」陸伽陀が涼州

への攻撃を繰り返し、最終的に安修仁によって撃破されている。これらの事實もあることから、武威安氏と突厥との関係は一概に「親密関係」とは言い切れない。

- (26) 吳玉貴「涼州粟特胡人安氏家族研究」(榮新江主編『唐研究』三、一九九七、二九五—三三八頁) 三〇〇—三〇八頁など。

- (27) 拙稿「新出土史料より見た北朝末・唐初間ソグド人の存在形態——固原出土史氏墓誌を中心に——」六九頁、「隋・唐初の河西ソグド人軍團——天理圖書館藏『文館詞林』「安修仁墓碑銘」殘卷をめぐる——」八一—九頁。

- (28) 森安孝夫『シルクロードと唐帝國』(講談社、二〇〇七、一三五—一三六頁)。

- (29) 吳玉貴「涼州粟特胡人安氏家族研究」三二二頁。

- (30) 四庫全書所收『張燕公集』は前半部分を「水出渥洼之文、神馬者二千乘」に作るが文意に大差はない。また『文苑英華』は後半部分の「武」を「曳」に作るが、これでは文意が通らない。

- (31) 李正宇「渥洼水天馬史事綜理」(『敦煌研究』一九九〇、三、一六一—二三頁)。

- (32) 「崆峒の武」の典拠については、東洋史研究會編集委員會の教示に據る。なお、崆峒山の位置については、現甘肅省酒泉縣(隋の張掖郡福祿縣、現甘肅省岷縣の西(隋の臨洮郡臨洮縣。以上『隋書』地理志)、現甘肅省平涼市の西(唐の原州平高縣の西。『史記』卷一、五帝本紀中の『史記正義』所引『括地志』等、諸説がある。

- (33) 『文苑英華』は「監牧使」を「監牧」に作る。

- (34) 『通典』卷一七二州郡二では赤水軍に關する記載は脱漏している。また新泉軍の兵士數は一千とある。

- (35) 固原史氏一族墓については、寧夏回族自治区固原博物館・羅豐編著『固原南郊隋唐墓地』(文物出版社、一九九六)、寧夏回族自治区固原博物館・中日原州聯合考古隊編『原州古墓集成』(文物出版社、一九九九)。墓誌に對する研究としては羅豐『隋唐史氏墓誌』(同氏著『胡漢之間——「絲綢之路」與西北歷史考古』中華書局、二〇〇四、四二—四八八頁)、ソグド人墓誌研究ゼミナール「ソグド人漢文墓誌譯注(一) 固原出土「史射勿墓誌」(隋・大業六年)』(『史滴』二六、二〇〇四、五一—七二頁)、「ソグド人漢文墓誌譯注(二) 固原出土「史訛耽夫婦墓誌」(唐・咸亨元年)』(『史滴』二七、二〇〇五、一五三—一八三頁)、「ソグド人漢文墓誌譯注(三) 固原出土「史道洛墓誌」(唐・顯慶三年)』(『史滴』二八、二〇〇六、一〇三—一一九頁)、「ソグド人漢文墓誌譯注(四) 固原出土「史鐵棒墓誌」(唐・咸亨元年)』(『史滴』二九、二〇〇七、八一—一〇三頁)。

- (36) 隋の煬帝期に設置された都尉官については、平田陽一郎「隋煬帝期府兵制の再檢討——總管制廢止と都尉官設置について——」(『早稻田大學大學院文學研究科紀要』四五、四、二〇〇〇、八七—九七頁) 參照。

- (37) 羅豐『隋唐史氏墓誌』四七一—四七二頁。

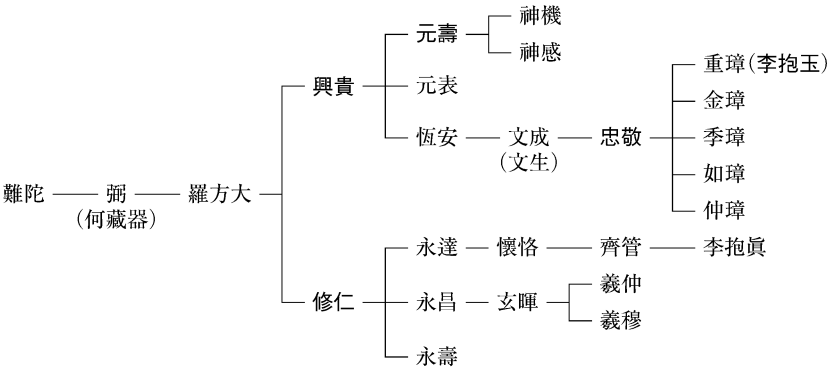
- (38) 榮新江「粟特與突厥——粟特石棺圖像的新印證」二二頁。

- (39) 羅豐「隋唐史氏墓誌」四七二頁。
- (40) 森安孝夫『シルクロードと唐帝國』一三五—一三六頁。
- (41) 例えば、太原より出土した「虞弘墓誌」からは、北朝末より隋初にかけて山西の北部に「胡人」を主體とする軍府が多數存在したことが推測される（虞弘墓誌については山西省考古研究所・太原市文物考古研究所・太原市晉源區文物旅遊所『太原隋虞弘墓』文物出版社、二〇〇五。虞弘と軍府については拙稿「新出土史料より見た北朝末・唐初開ソグド人の存在形態——固原出土史氏墓誌を中心に——」六

五—六六頁）。また靖邊から出土した「翟曹明墓誌」には、ソグド人と見られる翟曹明が、北魏の東西分裂において自ら西魏軍に身を投じ戦功を挙げたことが記されるという（蘇航「北朝末期至隋末唐初粟特聚落鄉團武裝述論」『文史』二〇〇五・四、一七三—一八五頁の一七七頁）。

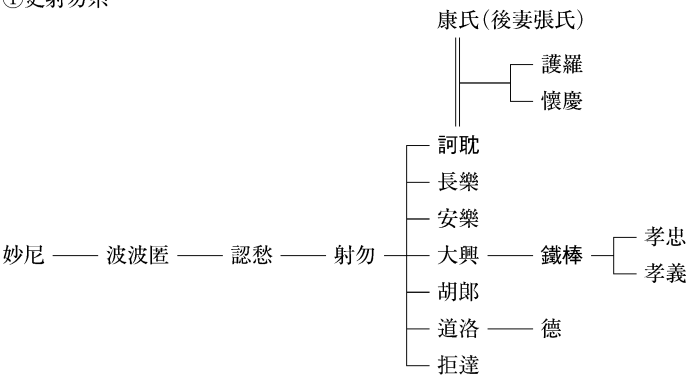
〔附記〕 本稿は平成十九年度岐阜聖徳學園大學研究助成金による成果の一部である。

圖一 武威安氏系圖

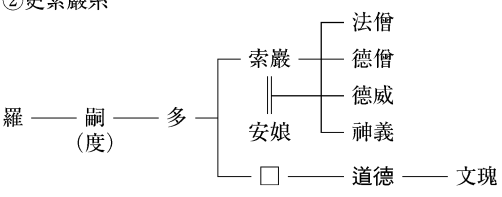


圖二 原州史氏系圖

①史射勿系



②史索巖系





## THE TANG PASTURAGE OVERSEER SYSTEM AND THE PASTURAGE OF THE SOGDIAN IN TANG

YAMASHITA Shôji

From the end of the Northern Dynasties to the initial stages of the Tang many Sogdians moved into China, formed settlements, and became active. Among these groups of Sogdians in China those who displayed the greatest power were the An clan 安氏 of Wuwei 武威 and Shi clan 史氏 of Guyuan 固原. The An of Wuwei who had led Sogdian warriors during late-Sui-early-Tang period to topple the Li Gui 李軌 regime commended the Hexi region to the Tang shortly after the founding of the dynasty. The Shi clan of Guyuan, on the other hand, had been assigned as the officials in charge of the military command of all of Yuanzhou in the late Sui, but following the establishment of the Tang dynasty pledged their allegiance and cooperated in the overthrow of the Xue Ju 薛舉 regime in Longxi. Both groups had evolved into a type of armed body that assisted the Tang militarily in the unification of China.

There is one particular characteristic shared by the two groups. That is the fact that they were often appointed to the office of pasturage 牧馬官, that is to say as officials concerned with overseeing the management and breeding of horse for military use in the Tang dynasty. As regards the An clan of Wuwei, one An Yuanshou 安元壽 was appointed to the post of Pasture Master of Xiazhou 夏州群牧使. The post of Pasture Master of Xiazhou seldom appears in historical records, but based on my analysis, it is clear that it was the supreme official charged with the breeding of war horses at the time. Furthermore, when Tang established a new system for the breeding of war horses in Hexi at the beginning of the 8<sup>th</sup> century, the director was chosen from the An clan of Wuwei. On the other hand, after the Tang established the system for breeding war horses known as the pasturage overseer system 監牧制 during the Zhenguan era, members of the Shi clan of Guyuan successively occupied the top post in charge of government pastures where war horses were actually bred. They consistently supported the establishment and spread of the Pasturage Overseer system.

If one explores the background to the appointment of members of both these groups of Sogdians to the posts in the office of pasturage, the fact becomes clear

that both groups were active in the private breeding of war horses prior to the establishment of the Tang dynasty. This reality, that the Sogdians, who have heretofore been seen as merchants, can be understood as having formed armed bodies in the past should be recognized. In other words, the occupation of breeding and trading war horses, would have necessarily deepened their involvement with military matters and led them to become militarized.

**THE HISTORY OF THE AGRICULTURAL EXPLOITATION OF  
CÔI TRÌ VILLAGE IN NINH BÌNH PROVINCE IN THE  
RED RIVER DELTA OF VIETNAM  
: A RECONSIDERATION OF RELATIONS BETWEEN LOCAL  
AND NATIONAL OFFICIALS AND THE POPULACE**

YAO Takao

During the reign of Thánh Tông, the fifth emperor of the Lê dynasty, which had been established early in the 15<sup>th</sup> century, an administrative system was instituted and a highly uniform system of local administration was also created. In regard to the administration of land, the system of equitable distribution of rice fields based on public rice fields was likewise instituted and a policy of social equality was promoted. Despite this fact, the development of new rice fields was aggressively promoted. These efforts to exploit the land can be seen classified into three types based on the character of the developer, (1) powerful noble families who were associated with the founding of the dynasty, (2) government officials, and (3) ordinary farmers.

The Côi Trì village in Ninh Bình province in the lower Red River delta was developed by the method known as *Chiếm xạ* which meant development by those from other provinces. In earlier studies it has simply been assumed that it was closely related to *Hồng Đức* banks, which were constructed in the area by the national government at the same time, however, the specific course of the development has not been made clear.

On the basis of local sources written by the descendants of the developers, this study points out that the people secured many private rice fields even though they faithfully followed the government's *Chiếm xạ* method of development, that recruitment of new members was frequently conducted relying on blood and neighboring relationships built up over 30 years of the development process, and